

而して一の面白い現象は色盲が西洋人に多くして東洋人に少いことである。蓋し色盲と云ふものは天然の欠損であつて、網膜にある色に關する細胞の欠けたもので生理上の欠損である。

Wer dir von andern Schlecht spricht,  
Spricht auch andern Schlecht von dir.

汝の面前にて他人の悪口をいふ者は他人の面前にて又汝の悪口をいはん。

# 史傳

節女阿正の傳 (承前)

米 溪 子



霞に匂ふ花の蔭、狂風屢驚さ易く、冷露滴る月の前、妖雲頻りに思を惱ます、あはれ、阿正は之れ孱弱なる一介の女子、利に迷ふ悪鬼に擁せられて、閻王廳下の幽囚となり、鐵案將に下らんとす、紅蓮か、焦熱が、愁緒胸に纏れて獨り唇を噛み、万感湧き來りて涙潜々たり。  
万助苛立て曰く、此の事、最早九分を運ぶ、残る所は末の一段のみ、末事に拘はりては到底大事

を決し難し、今に至りては何の喋々するに及ばんや、唯速に期を刻すべし、須らく、先づ吉辰を卜し結納を納るべし、暦何處にあるか、何をか躊躇するを用ひんと。善次に、暦日を閲して日を定めんことを囑す。善爺懐を探り、眼鏡を出し、唇を灯影に翳し、日を探りて曰く、某日！吉、善は急げと云へば、唯、速に定めんと。衆議是に至りては寸刻の猶豫もあらず。一言の下、忽ち決す。目々相顧みて慶し、酒を東家に求めて、厨房邊かに賑はしく、歡飲夜を徹して、笑聲頻りに湧く。

阿正嗚咽、獨り泣を飲みて、一室に踞み、少しも頭を擡げず。隣室の宴、漸く熟して、談笑手に取るが如く耳に入るも、其の獻酬歡呼の聲は、却て、惡鬼血に笑ふが如く、慶喜、來を談ずるを聞かば、熱鐵の咽を過ぐるよりも苦し、一夜は斯く

して過しぬるが、愁雲争でか、明け行く空と共に晴れんや。倩ら、越し方を顧み、行く末を想へば心暗く、情迷ふも、一人の慰むるなく、消魂獨り腸の寸断するのみにあらず。

花顔涙に濕ふも、粧ふに懶く、雲鬢亂れ擾れて、梳るに力なし、父や母や、既に幽明を隔て、愁思訴ふるに所なく、頭を擡げて、彼の白雲の行方を眺むれば、冤狂空しく情を痛ましめて、涙更に幾行。噫、此の髮、誰か爲に梳らん、此の容、誰か爲に理めん、晨鷄は希望を齎らして曉を告ぐれども、わが命運の迫るを覺ゆるのみ、暮雲低く垂れて、晚鴉杜の梢に舞ふ、おはや、一日を過しぬ窮境一步を近づくと奈何んせん。飯粒咽を下らず形容憔悴、梳粧皆廢して、涙痕獨り新なれば、家にも變あらんことを慮りて、交々之を守りて、少

しの隙もあらざりき。

斯くて數日を過せしが、何か感ずる所あるか、將又別に考ふる所にてもあるか。阿正忽ち涙を收め、稍亂れたる髪を理し、涙痕を拭ふて面を醜するに至りぬ。

思ひ一途に疑りては、無理亂れ易く、情一時に迫りては、方寸定まり難きものなるも、靜かに席を逐ふて慮を定むれば、豁然として通すべく、徐ろに神を潜むれば、釋然として解すべし。まして、榮に馳せ、安に向ふは浮世の常にして、華に向ひ利に陥り易きは、婦人の弱點なれば、阿正、洒然として其の態を改むるを見るや、家人等窈かに、恐らくは其の志を改むるに至りしならんと、思へるなり。されば、魚を漁するものは、一面之を驚かして、網を其の安んずる所に張るが如く、家

人の防護も、此に至りて寢解け、代ふるに慰諭を以てし、温顔款待によりて其の意を迎へんとす。阿正一日間を得るや、先づ沐浴して身を潔くし、衣を整へ容を理するも、家人毫も意とせざるなり。装ひ既に成るや、懸てひそかに、屋後の炭廠に入り、筵を延べ、端座西に向ひ、懷にせる所の厨刀を以て咽を貫き、兩手を膝に據し、伏して瞑す。時に年十八、

春風一夜妬雨を誘ふて、今朝の庭前、落語吉石に狼藉たり。家人の驚き、知らず幾許なるべきぞ。義母は初めより、阿正の様子唯ならざるを識りて、稍、猶斷をなさりしに、風と、其の不在に氣付くや、大に驚き、四隣を尋ねて、其の所在を索めしも、隣人等皆云ふ、近頃、久しく、彼の姐を見ざれば、如何にせしぞと、思へるのみと、因

て、自家に歸りて、周ねく四邊を搜めしに、炭廠の邊りに至りて、流血の淋漓たるものあるに遇ひ戸を排して、内に入れば、醒風先つ面を撃て、眼前に横はるものは何！。三寸息絶て花容又昔日の人にあらず。幽魂何處の邊に彷徨ふらん、死尸空しく血に塗れ、而も端然其の容を亂すなく、從容として死に赴ける様を見る。其の驚き知るべきなり、

折ふし、嘉右衛門出て、他に在りしかば、使を急がして、呼び歸しへに、變を聞かや、倉惶馳せ至り、先づ其の四邊を見るに、別に小机を傍らに置き、遺書二通を安せるあり。

(未完)

黒澤登幾子 (第九號につづく)

下村三四吉

登幾子が里方にかへりし後、これに再嫁を勸むるものありしかど、固く執りて聽かず。亡夫彦藏のわすれがたみたる幼女の年長ずるに及び、これが婿を迎へて家を繼がしめ、靜に餘生を送りぬ。女紅の餘暇に詠出せる國風は積んで巻を成し、風流韻事に復他念なきが如くなりしも、深く國事に心を潜め、憂世慨時の情は、また自ら詠歌の裡に發露せりき。

天保以後に於ける幕府の衰運は、次第に事實の上に見はれ、西洋諸國の壓迫は、ますますその急を告げ來り、終に嘉永六年ペルリ提督に率ゐられたるアメリカ合衆國の船艦は、浦賀に來りて、我